萬葉集略解

十九上

柳田文庫
文庫11
A 104
28

萬葉集巻第十九

天平勝寶二年三月一日之暮詠桃李歌二首○見翻翔鴫作歌一首（本文見の下飛の字あり）○二日攀柳黛思京師歌一首○攀折堅香子草花歌一首○見歸鴈歌二首○夜裏聞千鳥喧歌二首○聞曉鳴鵼歌二首○遥聞泝江船人唱歌一首○三日越中守大伴宿祢家持之舘宴歌三首○八日詠白大鷹歌一首并短歌（今本日を月ニ誤 本文ニ依テ改）○潜鸕歌一首并短歌○過澁溪崎見巖上樹歌一首（傍によるに九日とす下）○悲世間無常歌一首并短歌○豫作七夕歌一首　○慕振勇士名歌一首并短歌（慕を暮ニ誤 本文ニ依テ改）○詠霍公鳥并時花歌一首并短歌（花の上時の字を脱 本文ニ依テ補）○為家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌○二十三日詠霍公鳥作歌二首○贈京

柳田泉文庫
48 10666
文庫11 A 104 28

丹比家歌一首○二十七日追和筑紫太宰之時春花梅
歌一首○詠霍公鳥歌二首○四月三日贈越前判官大
伴池主霍公鳥歌不勝感舊之意述懐歌一首并短歌
○不飽感霍公鳥之情述懐作歌一首并短歌○四月五
日從京師贈来歌一首○詠山振花歌一首并短歌○六
日遊覧布勢水海作歌一首并短歌○九日贈水烏越前
判官大伴池主歌一首并短歌（鳥を鳥ニ誤 本文ニ依て改）○詠霍公鳥并
藤花一首并短歌○更怨霍公鳥哢晩歌三首○贈京人
歌二首○十二日遊覧布勢水海望見藤花各述懐謌四
首（本文海の下船泊多祜灣とあり）○恨霍公鳥不喧歌一首○見攀折保寶
葉歌二首○守大伴家持仰見月光歌一首（本文ニ還時濱上とあり）○
二十二日大伴家持贈判官久米廣繩霍公鳥怨恨歌一

首并短歌○二十三日掾久米廣繩和家持作歌一首并
短歌（本文詠霍公鳥とあり）○五月六日大伴家持同慶女墓歌一首
并短歌（本文追和處女ミとミて八誤れり）○贈京丹比家歌一首○二十七日
大伴宿禰家持弔聟南右大臣家藤原二郎之喪慈母挽
歌一首并短歌（弔をヱテニ誤、本文母の下患の字ミ）○霖雨晴日作歌一首○見
漢夫大光歌一首○六月十五日見芽子早花歌一首（芽を芽ニ誤る）
并短歌○大伴氏坂上郎女從京師来賜女子大孃歌一首
并短歌○九月三日宴歌二首○幸吉野宮時藤原皇后
御作歌一首（皇后藤原皇右と己ハ誤之本文ニ依て改）○十月十六日餞朝集使
少目秦伊美吉石竹時大伴家持作歌一首（大伴の上守の字ミし）○
十二月大伴家持雪日作歌一首○三形沙彌贈左大臣
歌二首（此目録誤れり右詞ニ三形沙彌承贈左大臣藤原北卿之語作誦之也ミミとあれバミさまにあるべきなり）○天平勝

寶三年正月二日零雪殊多守大伴宿禰家持館宴歌一
首○三日介内藏忌寸縄麻呂館宴樂時大伴家持作歌
一首○同日掾久米朝臣廣縄作歌一首（本文ニ于時積雪云々の諸詞アリこゝハ略せり）
○遊行女婦蒲生娘子歌一首○同日酒酣更深鶏鳴内
藏伊美吉縄麻呂作歌一首　守大伴家持和歌一首○
太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天皇歌一首○悲傷
死妻歌一首并短歌○二月二日判官久米廣縄以正税
帳應入京師仍大伴家持作歌一首（本文三日とあり）○四月十六日
大伴家持詠霍公鳥歌一首○春日祭神日藤原太后賜
入唐大使藤原朝臣清河御作歌一首　大使藤原朝臣
清河歌一首　大納言藤原家餞入唐使歌三首○天平
五年贈入唐使歌一首并短歌○阿倍朝臣老人遣唐時

奉母悲別歌一首○七月十七日越中守家持時遷任少
納言作悲別歌贈貽朝集使掾久米廣縄館二首（守の下大伴の字脱）
○八月四日内藏伊美吉縄麻呂館設國厨之餞大帳使
大伴家持時家持作歌一首（餞の上饌の字あるへし）○五日平旦大帳使
大伴家持和内藏伊美吉縄麻呂捧盞歌一首（本文ニ五日平旦上道仍国
司次官已下云々の諸詞あるを今ハ略せり）○正税使掾久米朝臣廣縄事畢退任遇越
前国掾大伴池主館時久米廣縄詠芽子花作歌一首
大伴家持和歌一首○向京路上依興預作侍宴應詔歌
一首并短歌○爲壽左大臣橘卿預作歌一首（々哥の字を脱）○十
月二十二日於左大辨紀飯麻呂朝臣家宴哥三首○壬
申年亂平定以後歌二首○閏三月於衛門督古慈悲宿
禰家餞之入唐副使同胡麻呂等歌二首（閏三月の上天平勝宝四年とあるへし　古慈悲）

の名の上大伴の氏を脱せり ○高麗朝臣福信遣難波賜肴酒入唐使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌○大伴家持為應詔儲作歌一首并短歌○天皇太后共幸於大納言藤原卿家時賜黄葉澤蘭於大納言藤原卿并陪従大夫御歌一首 本文澤蘭一株抜取令持内侍佐々貴山君とことを畧り卿を郷に誤 ○十一月八日太上天皇於左大臣橘朝臣宅肆宴歌四首○二十五日新嘗會肆宴應詔歌六首○二十七日林王宅餞但馬按察使橘奈良麻呂朝臣宴歌三首○五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌三首○十一日大雪述拙懐歌三首 本文積尺有二寸とあるをこゝに畧けり ○十二日侍内裏聞千鳥喧歌一首○二月十九日於左大臣橘家宴見攀折柳條歌一首○二十三日依興作歌二首○二十五日詠鶬鶊歌一首

天平勝寶二年三月一日之暮眺矚春苑桃李花作歌二首 以下かゝるは都ての例也

春苑紅爾保布桃花下照道爾出立𡢳嬬

はるのそのくれなゐにほふもものはなしたてるみちにいでたつをとめ

花のにほきをとめが桃李の木のもとに出立るが花もをとめもなる艶を増るさまなり、たてるの詞ハ赤きてるをいひて照とかけり

吾園之李花可庭爾落波太禮能未遺有可母

わがそののすもものはなかにはにちるはだれのいまだのこりたるかも

雪の斑に降るごとく、巻十三ちりまがふをそへる由をかけり

見飛翻翔鴫作歌一首

春る月をみゆるまじあれバ見えとよし

あるほん、一本飛の字なし

春儲而物悲爾三更而羽振鳴志藝誰田爾加須牟

はるまけてものがなしきにさよふけてはぶきなくしぎたがたにかすむ

はぶきハ羽を振ふ、やまぶきは山振とかけり、又此集に羽翻ともかけれバここも

はぶきとも訓べし、須元暦本頷とあるくハをむと点せり

二日攀柳黛思京師歌一首

春日爾張流柳乎取持而見者京之大路所思

はるのひにはれるやなぎをとりもちてみれバみやこのおほぢおもほゆ

はれるハ芽のはりたるをいふ、巻十にうちなびく春ぞなりたるみまき柳のはりて

たてれバかのもひつもしくしあり、京の大路の柳をおもひ出る也

攀折堅香子草花歌一首

物部能八十乃媙嬬等之挹亂寺井之於乃堅香子之花

もののふのやそのをとめらがくみまがふてらゐのうへのかたかごのはな

もののふの枕詞、やそのをとめハあまたの女といふ、等ハ八十とりふつらねて

あるの也、挹字ハ一入切音揖酌也とあり、寺井ハただ寺の井なり、又地名

なくてまがふハあまたの女の汲ちがふ也、従ふとかけり、六帖本の歌

にもののふのやそをとめらがふみとよむてらゐのうへのかたかしの花

とて載たり、仙覚抄ニ此の新点古点ニかたかこのしのぶなと点せり、

そをかたこのごのもなとよむべし、かたこぞ又ハゐのもとなといふ、

花咲、其花の色ハ紫にして、翁のいふ、越のくにゝてハかたこ、

みちのくにてハかたくりといへり、根ハ百合のごとく、葉ハ二葉一葉さし

出て、花ハ又一もとに一つ、さきたれのごとくうつむきて咲、されど春ニ

よれバ大きなるハ一つで、かたこといふ事ハ、このいふハ堅香子とかきて

堅香子と大書て、おやつの事といへれき、ゆゑに堅香子と書訓

を更てかたこしとよむべき根あるなれバ、必かたこごゝえそかたこハ

仮字かたこにかきいでてかつてハかたことゆめとしいへり、かたこ

くにハかくこゆりの俗りくるといへ

見歸雁歌二首

燕来時尓成奴等鴈之鳴者本郷思都追雲隠喧

つばめくるときになりぬとかりがねはくにしのひつゝくもがくりなく

月令曰孟春之月鴻鴈来、是月也玄鳥至、注云、玄鳥燕也、和名抄鷰豆波久良米白脰小鳥也、本郷古点ふるさとゝあれど、集中ふるさとゝよめるハすべて古京の地をいひて、本郷とかけるハさとゝよめるなし、巻十わぎもにちかきし屋がねを雲のよそにとひなくかり隈へうしゆくとよまれバこなたとよむべし

春設而如此歸等母秋風尓黄葉山乎不超来有米也

はるまけてかくかへるともあきかぜにもみぢのやまをこえざらめやも

一云春去者歸此鴈（ハルサレバカヘルコノカリ）

夜裏聞千鳥喧歌二首

夜具多知尓寝覚而居者河瀬尋情毛之奴尓鳴知等理賀毛

よぐたちにねざめてをればかはせとめこゝろもしぬになくちどりかも

よぐたちハ夜のふくるをいふ、くだちハゆく人の心もしぬにまつはるなり、三句よりまへつゞけてよむべし

夜降而鳴河波知登里宇倍之許曽昔人母之奴比来尓家礼

よぐたちてなくかはちどりうべしこそむかしのひともしのびきにけれ

むかしよりちどりの声をあはれとしのびきつるといへるなりてあかひあらせるなり

聞暁鳴鴙歌二首

浙ヲ泝ニ誤

揖野爾左手騰流鵜灼然啼爾之毛将哭己母利豆麻可母

まさぎのぬまにとびたつきゞしいちじろくねにしもなかんこもりづまかも

まさぎの野越中なるべし、さとびるのさハ発語、宝ちら世の句の語の勢をみるに、これハ雉のいちじろく鳴をとがむるさまにて、かもハかハの

意にてかりづまとハとがめてよめるか、後ていへるにかなつまされバいま

見んバよそかくいちじろく鳴べきなどのハとよくよみて此雉をいふべし

足引之八峯之鵜鳴響朝開之霞見者可奈之母

あしびきのやつをのきゞしなきとよむあさけのかすみみればかなしも

やつをハ只峯のかさなれるをいふ、峯やつをのつゞきとしよめり

遥聞浙江船人唱歌一首

朝床爾聞者遥之射水河朝己藝思都追唱船人

あさどこにきけばはるけしいみづかはあさこぎしつゝうたふふなびと

棧ヲ栰ニ誤

あくる朝起出ざるほどにきゝて

三日守大伴宿禰家持之館宴歌三首

今日之為等思標之足引乃峯上之櫻如此開爾家里

けふのためとおもひてしめしあしびきのをのへのさくらかくさきにけり

今日の宴のためと何そ思ひしめつる

奥山之八峯乃海石榴都婆良可爾今日者久良佐禰丈夫之徒

おくやまのやつをのつばきつばらかにけふはくらさねますらをのとも

上ハつばらといはん序也、つばらハつまびらかにといふ意、ねハよばひくらせといふこと也、巻十八かぢの歌のつばらくあかしよあり

漢人毛棧浮而遊云今日曾和我勢故花縵世余

からびともいかだうかべてあそぶてふけふぞわがせこはなかづらせよ

檝字ニ同、筏ハ音罰、桴也、船也とあれバ今本檝とあるハ誤也、かの国
ゆく三月さる水に遊びてかざしし也、花後ハ此の花を糸に貫て
かづらにかくるなるべし

八日詠白大鷹歌一首并短歌

安志比奇能山坂超而。去更。年緒奈我久科坂在故志
あしびきのやまさかこえて ゆきかへるとしのをながくしなざかるこし
爾之須米婆大王之敷座國者京師乎母此間毛於夜自等
にしすめばおほきみのしきますくにはみやこをもここもおやじと
心爾波念毛能可良語左氣見左久流人眼。乏等
こころにはおもふものから かたりさけみさくるひとめともしみと
於毛比志繁曾己由惠爾情奈具也等秋附婆芽子
おもひししげしそこゆゑにこころなぐやとあきづけばはぎ

開爾保布石瀬野爾馬太伎由吉氏乎知許知爾鳥布美立
さきにほふいはせのにうまだきゆきて をちこちにとりふみたて
白塗之小鈴毛由良爾安波勢也里布里左氣見都追伊伎
しらぬりのをすずもゆらにあはせやりふりさけみつついき
騰保流許己呂能宇知乎思延宇禮之備奈我良枕附
どほるこころのうちをおもひのべうれしびながらまくらづく
都麻屋之内爾鳥座由比須惠氏曾我飼真白部乃多可
つまやのうちにとぐらゆひすゑてぞわがかふましらふのたか

初二句ハゆきこのつもといはん序也、表ざまにて国ハ
こしぢのやまをこしわが大王の遠国ハやまをこえても同じとぞいふ
そこをる京国ハ、梓やぶれたるがんかうきけてさかる人め、まさと
よびさくるうからやからなき国に、まさ五年まで在とそとぞいへる

えつぎてもみて、おのれそてんをかりて、なをとやるよしなきことをいひなせ
野ハ和名抄越中新川郡石勢伊波世とよめり、この鷹を、らへるときぎゆ
けがて、手放をさぐりゆきてといへり、古今集あまのなをくるぎい
さりせんとはよりよたぎるひとし、さるふるてハ巻三冬のかるなる
かささて巻十七ニ鈴鴾るいちつるとて冬かりふるなるやらさて
とよめり、白塗の鈴、巻十七わがおもふ白ぬりの鈴とりつけて
らとよくくてれにいひつ、そゆゑハ者ゆゑ、その狩に鷹ぐべくゆ
らハもちてくものなる音をかう、神代紀ニ瑲々の字を用、いきど
ほるハ神功紀忍熊王瀬田ニ沈みて、ひかる屍をいまだ探出さで
ありける時、武内宿禰の歌に、あふみのみせたのわたりにかづくとりめ
にしみえねば異本伊枳廼倍呂之茂 宇禮陵 伊支度保呂志又伊多弥宇礼不又憤伊支度止呂志とよめり、ひむはいかなるべきかといへれハ
此巻のはハ随のきてく去り待すまでにといふことへ後のなかざらの詞とハ

是れ桃てハまちの狩、つよやの弓をとくさらゆひをさなくて家狩ハ、
反舟ふやどにもちきしてよくとられハ、奥深く屋の内にとくさら立
て居(スヱ)おくこと、すゑふのふハ節(フシ)のこと、今切生(キリフ)などいふ

反歌

矢形尾乃。麻之路能鷹乎。屋戸爾須恵可伎奈泥見都追。飼
久之余志毛

やかたをのましろのたかをやどにすゑかきなでみつゝかはくしよしも
巻十七やかたをのましろの鷹といへり、かきなでてハ能もきこえ、母を云
ことばの語をとし撫でねきらまうことハかりてと延さ
鳥狩、しハ助辞

潜鸕(ウツカフ)歌一首并短歌　一本并短歌の三字を脱、一本に依て補

荒玉能。年往更春去者。花耳爾保布。安之比奇能。

あらたまのとしゆきかへりはるされば、そのさきまちよあしびきの
山下響 隨多藝知 流辟田乃河瀬爾 年魚兒
やましたとよみ、おちたぎち、ながるさきたのかはのせに、あゆこ
狭走 島津鳥鸕養等毋奈倍可我理左之奈津左比由氣
さばしる、しまつとりうかひともなへ、かがりさしなづさひゆけ
波吾妹子我可多見我氏良等紅之八塩爾染而 於己勢
ば、わぎもこがかたみがてらと、くれなゐのやしほにそめて、おこせ
多流服之襴毛 等寶利氏濃禮奴
たるころものすそもとほりてぬれぬ

耳ハ聞の誤なるべし、さきたハ越中、島つ考擬待、ともなへハ令伴
之此下のともなへましてもとも...ありさて越中新川
みさくハ家く川へおほちくら飼ぞ、ここの多摩川などの川瀬

衣ハさてのせり、このかりくまづさひゆけバといひ、又ころもそても
とほりてぬれぬ、ありめ、巻二君衣手ハあそりくぬれぬるてよみて、
衣ハ紅のでのをねの衣なく治とよるをいふ

反歌

紅衣爾保波之辟田河絶己等奈久吾等眷年
くれなゐのころもにほハしさきたがハたゆることなくわれかへりみむ
巻一これどもあかぬよしのの河のとこなめのたゆることなくまたかへりみむ
とこてるなよれし、又春なとこと、元暦本春なるをとりとす

毎年爾鮎之走婆左伎多河鸕八頭可頭氣氏河瀬多頭禰
年
としのはにあゆしはしらばさきたがハうやつかづけてかはせたづねむ
あゆしのしハ助辞、やつハ数多きをいふ、かづくとハかづかせてとるをいふ

季春三月九日擬出擧之政行於舊江村道上屬目物花之詠并興中所作之歌

目録にハ此端詞なし これハ以下も注也

すべての題標なるべし。舊江村ハ射水郡之

過澁溪埼見巖上樹歌一首 樹名都萬麻

礒上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神佐備尓家里

いそのうへのつまゝをみれバねをはへてとしふかゝらしかんさびにけり

いそとハ石をいへり。このいそのうへハ礒のあたりをいふ。つまゝいまだ考へず。樹名ごとくゝはしくハ越の名木とぞきこゆ。よる葦附水松類也と注せるがごとし。年深からしハ考ニふるき根の年深きことよみてハ年久しきをいふ

悲世間無常歌一首并短歌

天地之遠始欲俗中波常無毛能等語續

まヲ大ニ誤

あめつちのとほきはじめよよのなかはつねなきものとかたりつぎ

奈我良倍伎多禮天原振左氣見婆照月毛盈昃之家里

ながらへきたれあまのはらふりさけみればてるつきもみちかけしけり

安之比奇能山之木末毛春去婆花開尓保比秋都氣婆

あしびきのやまのこぬれもはるされバはなさきにほひあきづけバ

露霜負而風交毛美知落家利宇都勢美母如是能未奈良之

つゆしもおひてかぜまじりもみぢちりけりうつせみもかくのみならし

紅能伊呂母宇都呂比奴婆多麻能黒髪變 朝之咲

くれなゐのいろもうつろひぬばたまのくろかみかはりあさのゑみ

暮加波良比吹風能見要奴我其登久逝水能登麻良奴

ゆふべかはらひふくかぜのみえぬがごとくゆくみづのとまらぬ

其等久常毛奈久宇都呂布見者爾波多豆美流涕等騰米

ごとくつねしなくうつろふをみれバふるなみだとゞめ
可禰都母
かねつも
ちゞめよのよハよわくなゞらへきこえれハ巻十八きよみきこえしを
いふへよ今のをつよなぞのさみるしいつる同じく去つのおもひ來
たるよけよさへきこゆれバのバと思けり、うつせみハ現身之仁の
色もうつろひハ仁数の交るとなり、數の事を云、草葉てるが氣
るおもひとりよかゝらひハかりを延言、夕風のをゆくあのさ、
巻十五挽歌に、行水のかへらぬごとく、吹風のみえぬがごとく
よみかハふるくつゞき枕詞
反歌
言等波奴木尚春開秋都氣波毛美知遅良久波常乎奈美

許曽
ことゝぬきすらはるハさきあきづけバもみぢちらくハつねをなみこそ
ちらくハちるを延言、常をなくしてハ世の名あさわざとなりての
ハあれといふ
一云常無牟等曽（ツネナケムトゾ）
宇都世美能常無見者世間爾情都氣受氏念日曽於保伎
うつせみのつねなきこれバよのなかにこゝろつけずておもひぞおほきさ
こゝろつけずハいはゆる執着せぬ也、世まハ世あるのあるさまを觀念せるこ
一云嘆（ナゲク）日曽於保吉
豫作七夕歌一首
妹之袖和禮枕可牟河湍爾霧多知和多禮左欲布氣奴刀
爾

實多寶二誤

いもがそでわれまくらかんかはのせにきりたちわたれさよのふけぬとに

考ニ立渡の意ハ人のひざのへにてまくらかんといふ也下にさ夜の字とあり、

又集中柳のかづらきてもよくさきてかんを試る詞也、ともに此時の例の

也、彦星の名ともあり、室もよ刀糸ハ此句集中に多し、刀ハ外をそ倍云事

内ともいふと同じこと也、外と内とハ反對なるに同じ意なる由ハ外より

いへハあなたを内としていふ也、内よりいへハこなたを内として云也、さよふけ

ぬがよハ更たる方を内よりして云也倍もの表にかけぬ内よりいへハ夜の

方を内よりして云也といへり此ことよくまよく出つるを室もの役をきくるまで

に、おくれるれどころするに猶考べし

慕振勇士之名歌一首并短歌

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等於保呂

ちゝのみのちゝのみことはゝそばのはゝのみことおほろ

可爾情盡而念良牟其子奈禮夜母　大夫夜無奈之

かにこゝろつくしておもふらんそのこなれやもますらをやむなし

久可在梓弓須恵布理於許之投矢毛知千尋射和多

くあるべきあづさゆみすゑふりおこしなげやもちちひろいわた

之劔刀許思爾等理波伎安之比奇能八峯布美越左之麻

しつるぎたちこしにとりはきあしびきのやつをふみこえさしま

久流情不障後代乃可多利都具倍久名乎多都倍志母

くるこゝろさやらずのちのよのかたりつぐべくなをたつべしも

ちゝのみのはゝそばハ枕詞、実とそ語く實子能ふ、元歴ある本にくら致む、

おほろかハ疎か也、ふ子なれやもそしか持ての能すく、自らをさし

いつるも、投矢ハ集中なぐるさといふと同じ、神代紀於是取矢還投下

之ともいへり、投ハ射遣る也、さしまくるハ差任る也、不障さやらずとよむべし

神武紀にしぎハ佐夜羅孺（サヤラズ）いすぐハしくぢら佐夜離（リ）、これいまとお
ろへどころに佐夜利奴などゝ、さくさしまくるゝさやらむの二句
極まらず句の落くるなるらん、後のよのかうつべくハ後の代の人の
といきんがごとし

反歌

丈夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都具我禰

まをとこはなをしたつべしのちのよにきゝつぐひとも かたりつぐがね

名をしのしハ妙辞、がねハ後をかねて待ことの辞まて既にいへり

右二首追和山上憶良臣作歌　これハ憶良の哥、をのこやし

むなしかるべき万世ゝ語継べき名をたてずしてといへるを追和也

詠霍公鳥并時花謌一首并短歌

毎時爾伊夜目都良之久八千種爾　草木花左伎喧鳥乃

ときごとにいやめづらしくやちくさにくさきはなさきなくとりの

音毛更布　耳爾聞眼爾視其等爾宇知歎之奈要

こゑもかはらふみゝにきゝめにみるごとにうちなげきしなえ

宇良夫禮之努比都追有争波之爾許能久禮罷四月之立

うらぶれしぬびつゝあらそふはしにこのくれやみうづきしたて

者欲其母理爾鳴霍公鳥　従古昔可多理都藝都流鶯之

ばよごもりになくほとゝぎす　いにしへゆかたりつぎつるうぐひすの

宇都之真子可母菖蒲花橘乎　娘嬬良我珠貫

うつしまこかもあやめぐさはなたちばなををとめらがたまぬく

麻泥爾赤根刺晝波之賣良爾安之比奇乃八丘飛超

までにあかねさすひるはしめらにあしひきのやつをとびこえ

夜干玉之夜者須我良爾　暁月爾向而往還

ぬばたまのよるはすがらに、あかときのつきにむかひて、ゆきかへり
喧等余牟禮杼、何如将飽足
なきとよむれど、いかであきたらん

かはらよりは、かゝるを近云へ、ほとゝぎすぶれは巻二夜半のおもひ出す
ゑらく、巻十四にあまおもひ出ぬえらしぶれなどいふ、あらそふを
しれ、巻二巻六のゆくゑのあらそふにとよめり、ちしは同じ、詮なる
をかくあらそふ本のかぞらのなみは、ほとゝぎすをいふにて云、
梅は有争の有は相の語なれ、巻二相競、巻十相争、とかにあら
そふとよめり、字ちく争は本の語なく、あかくるなるべし、あらそふと云
よしまは由もとは、ひ替を、このくれは本の嘯之、羅は借字にて闇之、
字ちは羅は能の語にて、このくれのなからんといふ、よでもかは夜籠之、
鶯のうつしまこそは、巻九に鶯のかひこの中に

ほとゝぎすひとりうまれて、とよめり、うつしは聲をとうつくしづまてよあ
れば、うつゝのくを略るなるべし、宣長はうつは現なりといへり、まてま
巻九人ならば母のまれなるべしとよめるまを手を以て同じく、夏の
ことりよ、こゝは巻十三畫者終（シミラ）尓となる

反歌二首

毎時、彌索頭良之久、咲花乎、折毛不折毛、見良久之余志母
ときごとに、いやめづらしく、さくはなを、をりもをらずも、みらくしよしも

毎年、彌来喧毛能由恵、霍公鳥、聞婆之努波久、不相日乎於保美
としのはに、きなくものゆゑ、ほとゝぎす、きけばしぬばく、あはぬひをおほみ

毎年のはるそのことし、しぬばくはしのばむを近云へ、あはぬはきた
ぬとりなるこをいふ

毎年謂之等之乃波　此従活本之麿本にちかくて、之麿あるに
らしごとふとよそり
右二十日雖未及時依興豫作也
為家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌　家婦ハ坂上大
娘、尊母ハ大伴坂上郎女之
霍公鳥来喧五月雨　笑爾保布　花橘乃　香吉
ほとゝぎすきなくさつきにさきにほふはなたちばなのかぐはしき
於夜能御言朝暮爾不聞日麻禰久安麻射可流夷爾之居
おやのみことあさよひにきかぬひまねくあまざかるひなにしをれ
者安之比奇乃山乃多乎里爾立雲乎余曽能未見都追嘆
ばあしびきのやまのたをりにたつくもをよそのみみつゝなげく
蘇良夜須家久奈念蘇良苦伎毛能乎奈呉乃海部之

そらやすけくなくおもふそらくるしきものをなごのあまの
潜取云　真珠乃　見我保之御面多太向　将見時
かづきとるちふしらたまのみがほしみおもわたゞむかひみんとき
麻泥波松柏乃佐賀延伊麻佐禰尊　安我吉美
まではまつかへのさかえいませねたふときあがきみ

御面謂之ヲ
美於毛和

笑を笑に誤れり、香吉かをよしみともよめれど誤なり、吉ハきのとのに
ゆかるん、おやのみことハそふるがゆゑぞしく御言之、きこえぬ日まねく八、既
に定むのいつるがく、数多きなるよりなり、集中例多し、君なくとて
いきこゝろぞ、此親のことゝ、父の命母の命とし、聞ハ関の誤にて、かけ
ぬひまねこともなんのとしるのいそれしハよものなぞ、山のこをかへたまで
さる所をりよ、やもてらくもすくふ、当年十七まで此詞也、安このうちく　ふと

いはく同じ、しらたまのはうるはしき面といへるよく寝させるか、清しお
もはゆ、末九ゑもち月のみてる面輪とよめり、楨和名抄、柏一名檞 和名加閉柏
賓一名梔子なぞいへるよく、今かやといへる木之閉と也と屈ぬなど後よ
訛れるに、かくてしるくし松柏とてなりく常葉なるをいへば今
かくよめるに、いまさねいいませを乞ふえ

反歌一首

白玉之見我保之君乎不見久爾夷爾之牟禮婆伊家流等
毛奈之

しらたまのみがほしきみをみずひさにひなにしをればいけるともなし

是は親をさして多くをりてあまりとよめりいへるそも同じ寛さにハ
いのちもなしといふは是之とは利心をもとりまて集中に心神もなしと
あるもいのちもなしとよめんといへる杉考へし

二十四日應立夏四月節也因此二十三日之暮忽思霍
公鳥曉喧聲作歌二首

常人毛起都追聞曾霍公鳥此曉爾来喧始音

つねびともおきつゝきくぞほとゝぎすこのあかつきにきなくはつこゑ

ここ人もハ家のうち世の人ととりてこゝ云、今夜は必ずなくべきなりとしく
よめる之

霍公鳥来鳴響者草等良牟花橘乎屋戸爾波不殖而

ほとゝぎすきなきとよまばくさとらんはなたちばなをやどにはうゑずて

是すは月来よて鳴ほとゝぎすをまつ吾ハかくらん今もゆ
此の居ハ今の径よくいまくさとれるとなりくもたるといれて
ある木の枝ふとまるといひくらかてほしいのとまるべき花
橘と宿ふうゑんものをといふをおもしていてかへるとといひて

苑ヲ苑ニ誤

贈京丹比家歌一首

妹乎不見越國敝爾經年婆吾情度乃奈具流日毛無

いもをみずこしのくにべにとしふればわがこゝろどのなぐるひもなし

こゝろどハよろこびの心、なぐるハなぐさむ心

追和筑紫太宰之時春苑梅謌一首　苑とし、苑は誤

春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊爾可有

はるのうちのたのしきをへばうめのはなたをりをきつゝあそぶにあるべし

是ハ梅の宴のそのうたの中に、むかしをきしまるばかりこそ

うめをきりてあそびきたらめ、又梅のはなをくらかざせる詩人ハ今の

あそびハたのしくまどひ、はるのうたよ和へさるまじ、あるきことへず、

それハ申つぎたるのきみハといへるなり、乎伎つとも遺つとしてハかる

遠つかもと折に遊ぶとそへハ那りしけるぞ、乎伎ハ毛伎の誤ぞ、

たまもちてなしんと言ものいつるぞよろしと為いそれき

右一首二十七日依興作之

詠霍公鳥歌二首

霍公鳥今來喧曾無菖蒲可都良久麻泥爾加流流日安良米也

ほとゝぎすいまきなきそむあやめぐさかづらくまでにかるゝひあらめや

そむハ始也、かづらくハよろこぶ也、かくしハ離之

毛能波三箇辭闕之　此三のことばを除くよみて古ヘ集よ同じをドなるこゝのちがひよ歟なり

我門従喧過度霍公鳥伊夜奈都可之久雖聞飽不足

わがかどゆなきすぎわたるほとゝぎすいやなつかしくきけどあきたらず

毛能波氐爾乎六箇辭闕之

此六のことばをよまずよみたれば、ちかの

づゝふハあらで、こゝらに除くる心也。くハそへたる助辞に用ゐることゝ
かくかれを除くハよそながらきなかつらく除くるにやあらん

四月三日贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥歌不勝感
舊之意述懐一首并短歌

和我勢故等。手携而。暁来者。出立向。暮去者。
わがせこと　てたづさはりて　あけくれバ　いでたちむかひ　ゆふされハ。
振放見都追。念暢。見奈疑之山。爾ハ峯爾波。霞多奈
ふりさけみつゝ　おもひのべ　みなぎしやまに　やつをにハ　かすみたな
婢伎。谿散爾波。海石榴花咲。宇良悲。春之過者。
びきたにべにハ　つばきはなさき　うらがなし　はるしすぐれば
霍公鳥。伊也之伎喧奴。獨耳。聞婆不怜毛。君與吾。
ほとゝぎす　いやしきなきぬ　ひとりのみ　きけばさぶしも　きみとわれ。

隔而戀流。利波山。飛超去而。明立者。松之佐枝爾。
へだてゝこふる　となみやま　とびこえゆきて　あけたゝば　まつのさえだに。
暮去者。向月而。菖蒲。玉貫麻泥爾。鳴等余米。
ゆふさらバ　つきにむかひて　あやめぐさ　たまぬくまでに　なきとよめ。
安寢不令宿。君乎奈夜麻勢
やすいしなさず　きみをなやませ

せこハ池主をさす。今本念鴨とあるハ念暢の誤なれバ、おもひのべ
と点せり。さもあるべし。みなぎしハ見えず。今を和せしといふ。此下のをも
少なるに情をも疑はしくよめれバ、やつをふハ、こゝに家ゐて池主
と同じく越中にありしを、池主越前掾になりて居るよしを
いへるにかくいへり。やつぎなきぬハ重鳴く也。となみ山越中、越前
の界也。とほき月までは、ほとゝぎすもいまだなきけるにや。こゝハ猶ほゝぎす

とゆくくさなびしさに堪ぬあまりに、汝ぞが住まんも思ひ行て、汝こがん
まりし翁うさしめよと、なしぎれにおぼゆるごとくなよあるに、考ふ夜
周伊新奈作農（スイシナサヌ）とあればこれもそのよみなるべし

反歌

吾耳聞婆不怜毛霍公鳥丹生之山邊爾伊去鳴爾毛
ひとりのみきけバさぶしもほとゝぎすにふのやまべにいゆきなくにも
和名抄越前国丹生郡丹生にてあり、ちくふてまくハさとこぶろ、爾ハ
南の誤にて、なそのなしとよむべきこ

霍公鳥夜喧乎為管我世兒乎安宿勿令寝由米情在
ほとゝぎすよなきをしつゝわがせこをやすいしなせそゆめこゝろあれ
せこハ池主をさして、木のきみのあるしとを同じ、つゝめくこゝろまで
啼けりしといふ也

不飽「感霍公鳥之情」述懐作歌一首并短歌

春過而　夏來向者　足檜木乃山呼等余米左夜中爾
はるすぎてなつきむかへバあしびきのやまよびとよめさよなかに
鳴霍公鳥　始音乎　聞婆奈都可之昌蒲　花橘乎
なくほとゝぎすはつこゑをきけバなつかしあやめぐさはなたちばなを
貫交可頭良久麻而爾里響喧渡禮騰母尚之努波由
ぬきまじへかづらくまでにさとよみなきわたれどもなほししぬばゆ
良の下沼ハ衍文なるべし、かづらくまでをかざるべし、麻の下而ハ元暦な
泥に作るをよしとす、古帖の小本のとり、菖蒲之昌ハ首の誤なるべし

反歌三首

左夜深而暁月爾影所見而喧霍公鳥聞者夏借
さよふけてあかときづきにかげみえてなくほとゝぎすきけバなつかし

霍公鳥雖聞不足網取爾獲而奈都氣奈可禮受鳴金

ほとゝぎすきけどもあかずあみとりにとりてなつけなかれずなくがね

網まて取をあみとりとは、なつくるはなつけんがためは設て鳴ね

霍公鳥飼通良婆今年經而来向夏波麻豆將喧牟

ほとゝぎすかひとほせらばことしへてきむかふなつはまづなきなんを

きむかふ夏は来ん年の夏をいふ

従京師贈来歌一首　此まよ以このヲ二そあらく、その説

小此歌は京の家より贈るる家持ての妹より越中の家持ての妻

へ贈れるよしなり

山吹乃花執持而都禮毛奈久可禮爾之妹乎之努比都流可毛

やまぶきのはなとりもちてつれもなくかれにしいもをしのびつるかも

此まへなるこゝろいましいもといへるはとへしよりとよめり、然れば女の親に

いひとはるべし、男どもおもへ去せてとは、おもふし、仁賢紀従は、

古者不言兄弟長幼女以男称兄男以女称妹故云於母亦兄於吾亦兄

耳、かれこれは離去しし妹は家持ての妻をさせり

右四月五日従留女之女郎所送也　留の下の女は郷の京の

誤なるべし、郎女に誤る

詠山振花歌一首并短歌

宇都世美波戀乎繁美登春麻氣氐念繁波引攀而

うつせみはこひをしげみとはるまけておもひしげくばひきよぢて

折毛不折毛毎見情奈疑牟等繁山之谿敝爾

をりもをらずもみるごとにこゝろなぎむとしげやまのたにべに

生流山振乎屋戸爾引植而朝露爾仁保敝流花乎

おふるやまぶきをやどにひきうゑてあさつゆににほへるはなを
毎見。念者不止。戀志繁母
みるごとにおもひはやまずこひししげしも
江家　此二字元暦本になしいと宜し
うつせみハ現身也、しげゞばハ茂けれバの意、折も不折もハ手折て
も見でも、折らずしても見るごとに心をなぐさまんと也、かく情をなぐさ
まんとて植れバ也、にほへる毎に念の止ことハなくて、恋のしげきといふ

反謌　今時を詠む語
山吹乎。屋戸爾植氐波。見其等爾。念者不止。戀己曽益禮
やまぶきをやどにうゑてはみるごとにおもひはやまずこひこそまされ

六日遊覧布勢水海作歌一首并短歌
念度知。大夫能。許能久禮。繁思乎。見明良米。

おもふどちますらをのこのこのくれのしげきおもひをみあきらめ
情也良牟等。布勢乃海爾。小船都良奈米。真可伊可氣。伊許
こゝろやらむとふせのうみにをぶねつらなめまかいかけいこ
藝米具禮婆。乎布能浦爾。霞多奈比伎。垂姫爾。藤浪
ぎめぐれバをふのうらにかすみたなびきたるひめにふぢなみ
咲而。濱淨久。白浪左和伎。及及爾。戀波末佐禮杼。
さきてはまきよくしらなみさわぎしくしくにこひはまされど
今日耳。飽足米夜母。如是己曽。彌年能波爾。春花之。
けふのみにあきたらめやもかくしこそいやとしのはにはるはなの
繁盛爾。秋葉能。黄色時爾。安里我欲比。見都追
しげきさかりにあきのはのもみぢのときにありがよひみつゝ
思努波米。此布勢能海乎

しぬだめこのよせのみを

久礼の下乃を脱せるか。このくれは木の下やみにて、こも木のくれのぬくと
りみをこめて鮮きをといふにひたしるし。つらつらは連々也。巻十五
いざみちてるあまのをとめは舟のかつらにふりかけてよめり。そよの
浦、云姫菅を越中によめり。ちくしは志はましかどもへ此不と辛くて
なんおくおつるこころはあまされど、あくりしは主さし、黄色時に、巻十七
杜さらばも毛美知能等伎尓とあれば、うしもそのよめり

反歌

藤奈美能。花盛尓。如此許曾。浦己藝廻都追。年尓之努波米

ふぢなみのはなのさかりにかくしこそうらこぎたみつゝとしにしぬばめ

此しぬだめは前にいへる和をめで慕ふことゝて

贈水烏越前判官大伴宿禰池主歌一首并短歌

今等毛毛ト有一ノ毛ハ衍文

浙ヲ沂ニ誤

和名抄鸕鶿辨色立成云大日鸕鶿（日本紀私記志万豆止利）小日鵜鶘（俗云宇、尓雅
註云鸕鶿水鳥也とあり。按に此鳥は烏の誤なるべし

天離。夷等之在者。彼所此間毛同許己呂曾。離家。

あまざかるひなとしあればそこもこゝもおなじこゝろぞいへさかり

等之乃經去者宇都勢美波物念之氣思賣許曾由恵尓情奈

としのへゆけばうつせみはものもひしげしそこゆゑにこゝろな

具左爾霍公鳥　喧始音乎　橘　珠尓安倍

ぐさにほとゝぎすなきそむるこゑをたちばなのたまにあへ

貫可頭良伎氐遊波之母　麻須良乎乎等毛奈倍立而

ぬきかづらきてあそばしもますらをゝともなへたてゝ

叔羅河。奈頭左比浙。平瀬尓波左泥刺渡。早

しくらがはなづさひのぼりひらせにはさでさしわたしはやせには

湍爾波水烏乎潜都追月爾日爾之可志安蘇婆補波之伎

せゞにはうをかづけて、つきにひに、しかしあそばゞはしき

和我勢故

わがせこ

江家　此二字元暦本にあるを補ふべし

あそぬきは相替へ、遊波之母、旧訓たはるればもとあれどよろし、下ノ皆

字のおくれよりおこりしことにて、遊波久与之母（アソバクヨシモ）なるを、久与の二字脱たる

なるべし、此哥よくよみてゆるやかにいへると見えバ此遊ぶの句あるべしと

見捨てみづからのうたといへるまで、さて次のまとまりまでといふより此書

のうたなれバ一首のことハ吾もさのとして遊ぶバ心すゞしきことよ

しくさてわがせこもたのしく遊びたまへといへる也、等毛今

本等毛毛とあり、一の毛ハ衍文也、とくまた八今伴のことにて此詞也、

叔羅河ハ越前人の今府に白鬼女（シラキメ）河あり、神名帳越前敦賀

白城（シラキ）神社、又信露貴（シロキ）神社あり、されば此叔ハ新の誤にて、しらき川

なるべしといへり、元暦本叔を彩とあれバ深字なるべし、又或人云神

名帳越前大野郡篠座（シヌクラ）神社あり、しぬくら川ならんといへり、此説もよし

平瀬ハあさせのことにてゆるやかなる瀬をいふべし、水鳥とかけて水鳥を

作るハよろしからず、二字をあらたむべきことを記せり

叔羅河端乎尋都追和我勢故波宇河波多多佐補情奈具

左爾

しくらがは、せをたづねて、わがせこは、うかはたゝさね、こゝろなぐさに

江家　そもと元暦本になし、補ふべし

たゞさねハたゞせとおなじことにて、鵜川を立とはいはでいへり

鸕河立取左牟安由能之我波多婆五百等爾可伎無氣念之

念婆
うのはらちとちらせんあゆのきでのはらハわれはかきむけおもひしもハ
きでのハそれがし、今本婆多婆とよ、上の婆を旧本波に作る、波美婆
ハ鰭者之、ひれをふ、かきハ詞にて、むけハ君を慕りてせ、われをおもひ
おもひとるらバとりよするて、おもひよよの詞を置くハ古言の例之

右九日陪使贈之

詠霍公鳥并藤花一首并短歌

桃花。紅色爾。爾保比多流。面輪能宇知爾。青柳乃。
もものはなくれなゐいろにゝほひたるおもわのうちにあをやぎの
細眉根乎。咲麻我理。朝影見都追。媙嬬良我。手爾
ほそまゆねをゑみまがりあさかげみつゝをとめらがてに
取持有。真鏡。蓋上山爾。許能久禮乃。繁溪邊乎。

余米ヲ下上二米余ト誤リ
とりもたるまそかゞみふたかみやまにこのくれのしげきたにべを
呼等余米。旦飛渡。暮月夜。可蘇氣伎野邊。遥遥爾。
よびとよめあさとびわたりゆふづくよかそけきのべにはろばろに
喧霍公鳥。立久久等。羽觸爾知良須。藤浪乃。花奈都
なくほとゝぎすたちくゝとはぶりにちらすふぢなみのはななつ
可之美。引攀而。袖爾古伎禮都。染婆染等母
かしみひきよぢてそでにこきれつそまばそむとも

ゑみまがりハ笑曲りまゆ、眉のゑめるかたちをいふ、又ゑみまけのけと
のびくかれといふとれをみれをしく、ゑみまがりといへるハ、ゑこちけ
ハ笑設之、朝影とつてハ浅くとらる、真淺といふまでハふていとん庵
のと、呼等米ハとめとゝめに訓されどよろし、呼等米尓ハ宝寄せ
呼等余米とよめしと係るべし。かくて久きハ繁の事なる也下ふし

夕風のかゝるをよめり、夕月の影を以、立てハまぐるゝ、こきれつゝハ、
こきハかきる同じく、同しく、かき入つゝ、其八月よせくちらバちるべき梅
の花、袖に古寸入津そまバそむでとよ、古く集にみだち袖にこきれ
てそているんとよめるも同じ、くゝに反歌と有べし

霍公鳥鳴羽觸爾毛落爾家利盛過良志藤奈美能花
ほとゝぎすなくはふれにもちりにけりさかりすぐらし藤なみの花

一云落奴倍美袖爾古伎禮都藤浪乃花也同九日作之
也の字ハ添てあるのミ

更怨霍公鳥哢晩歌三首

霍公鳥喧渡奴等告禮騰毛吾聞都我受花波須疑都追
ほとゝぎすなきわたりぬとつぐれどもわれきゝつがずはなはすぎつゝ
きゝつがでハ一こゑびすく、ほに待ぬとよ、鶯待に更怨とあり、

花ハ止の意をいへり

吾幾許斯奴波久不知爾霍公鳥伊頭敝能山乎鳴可將超
わがこゝだしぬぶくしらにほとゝぎすいづべの山をなきかこゆらん
吾ぬづくハ慕ふを延ていへ、いづべハいづれに同じ、卷二十枚の田のあへにき
よ新古何時邊乃方にても己の心やまん

月立之日欲里乎伎都追敲自努比麻低騰伎奈可奴霍公鳥可毋
つきたちしひよりをきつゝうちしぬびまてどきなかぬほとゝぎすかも
乎伎ハ招の古語也、卷十七枚廿の右に乎久よしのそこになくれハ文
招き集こふそし鳥のまき餌をさんとまづもとめく、郭公のま
づき餌なぞとまうけく招といへるやあらん、自ハ濁音にのミ用ふ、
されバよのちよりつゞけりて自ハ之便にて濁べきこの文ハ自ハ四の字

の横竪に詠るは語をなさゞる事を知べし、契けるこの月ごろ
とはゞ立夏なく、四月の節に入て自須らくなくべきころなれば
月つごもりにはなかざるといへり

贈京人歌二首　上に從京師贈来といへる歌の答也

妹尓似草等見之欲里吾標之野邊之山吹誰可手乎里之
いもにゝるくさとみしよりわがしめしのべのやまぶきたれかたをりし
上に山吹の花を折て贈られたるよりおこせたる答に二首ありてこゝも二首を贈れり。女の母と
妹といへるをこゝには娘と云。其女をさせる事ともみえざれど、なぐさめし
娘子の侍女人をさすそね

都禮母奈久可禮爾之毛能登人者雖云不相日麻禰美念
曽五爲流
つれもなくかれにしものとひとはいへどあはぬひまねみおもひぞわがする

上の贈答の三四の句はあてこともいひて、つれもなくかれ、は音をつれな
しといふ詞なり。かれし人とは郷にまかる人を云。まねき
は度の數多きをいふ詞也

右爲贈留女之女郎所誂家婦作也　女郎者即大伴家
持之妹　留女の女はよりはいへるごとくでは京の詞なるべし家婦は家持の妻也

十二日遊覽布勢水海船泊於多祜灣望見藤花各述懷
作歌四首　祜ハ祐ニ作、元暦本ニ依テ改

藤奈美能影成海之底清美之都久石乎毛珠等曽吾見流
ふぢなみのかげなるうみのそこきよみしづくいしをもたまとぞわがみる
かげは藤也、まで七句のありで白玉と見たりし。水底なる石の
みゆるといふ詞也

守大伴宿禰家持

多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐将去不見人之為

たこのうらのそこさへにほふふぢなみをかざしてゆかんみぬひとのため

次官内蔵忌寸縄麻呂

伊佐左可爾念而来之乎多祜乃浦爾開流藤見而一夜可經

いさゝかにおもひてこしをたこのうらにさけるふぢみてひとよへぬべし

いさゝかハかりそめのこと也八まきのはしまされつみてとあれば亭を

ともつりしを一よねぶる

判官久米朝臣廣縄

藤奈美乎借廬爾造灣廻為流人等波不知爾海人等可見良牟

ふぢなみをかりほにつくりうらみするひとゝハしらにあまとかみらん

灣廻ハ海人のさはにあるさまをいふ、こゝにいさゝかのすハ冠辞考よ

香しき藤の花をかり庵とつくりてあそぶをしる人もなくて

でもたゞつねの海人と人のみるらんといへる之

久米朝臣繼(ツグ)麻呂

恨霍公鳥不喧歌一首

家爾去而奈爾乎将語安之比奇能山霍公鳥一音毛奈家

いへにゆきてなにをかたらんあしびきのやまほとゝぎすひとこゑもなけ

えもたちよりしけのおとゝもいふる

判官久米朝臣廣縄

見攀折保寶(ホホガシハ)葉歌二首 和名抄本草云厚朴一名厚皮楊氏漢語抄云厚木 保々加之波乃木、今ほをのきといふ之

吾勢故我捧而持流保寶我之婆安多可毛似加青蓋

わがせこがさゝげてもたるほゝがしはあたかもにるかあをきぬがさ

儀制令に三位以上蓋を用ふるよしみえて一位ハ深緑とあり、ほゝかしハ葉色さる物のゆゑにかくいへり、あたかもハよく似たる事を云詞也

講師僧恵行

皇祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保寶我之波

すめろぎのとほきみよゝゝはいしきをりさけのむといふぞこのほゝがしは

御代ゝ世ゝとかさねて御代ゝのことゝいふは畳語、しきをりハ折敷

といふことにて、たべ物を盛るに木の枝葉を折しき、書紀葉盤八枚

葉盤此云毗羅耐、和名抄云本朝式云十一月辰日宴會其飲器參議以上朱漆椀、

五位以上葉椀、和語云久保天、文漢語抄云葉手、比良天、ちかごろの膳夫をかしハで

といふ也、よしく宣長云、布折ハ折布を下上に誤れるなるべし、さて酒飲

みハ志くとのみもいへど、あれバ布ハ誤字なるべし、二の句の波とよみて穏な

らねバ波ハ二の句へつきて、なれ誤字有べしといへり、考べし

守大伴宿禰家持

還時濱上仰見月光歌一首

之夫多爾乎指而吾行此濱爾月夜安伎氏牟馬之末時停息

しぶたにをさしてわがゆくこのはまにつくよあきてむうましばしとめ

つくよあきてんハ月をあくまでみんとなり、しぶたにハ越中のことにて

とあるのをこゝに保古にあるまし、末を今本未とするハ誤也

守大伴宿禰家持

二十二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥歌怨恨歌一首

并短歌　上の歌の字官本になし衍文也

此間爾之氏曾我比爾所見和我勢故我垣都能谿爾安氣
ここにしてそがひにみゆるわがせこがかきつのたにあけ
左禮婆榛之狭枝爾暮左禮婆藤之繁美爾遥遥爾
されバはりのさえだにゆふされバふぢのしげみにはろ〳〵に
鳴霍公鳥　吾屋戸能殖木橘　花爾知流　時乎
なくほとゝぎす わがやどのうゑきたちばなはなにちるときを
麻多之美伎奈加奈久曾許波不怨之可禮杼毛谷可多
まだしみきなかなくそこはうらみずしかれどもたにかた
頭伎氏家居有君之聞都都追氣奈久毛宇之
づきていへをれるきみがきゝつゝつげなくもうし

わがせこハ廣縄をさす 垣津能谿ハ此末にも見ゆる也 可伎都とて

よみて 其ハ君好まがやどの垣内のさゆり花などもあれバ 垣都ハ垣内にて
くねなど結廻らしたる所をいふなるべし 榛ハ雄略紀の歌のはりがえ
と同じく 今はんの木といふもの也 橘ハ庭に栽
たる橘をいふ 此時四月なれバ 橘の花の咲初たるを待
てなくべきハうらみずと也 言ちてまちしを八後世の言にて 常ね
鶯ハきとりて鳴ゆくといひて聞あへずして 去るハなくハきこえぬ
を延ていへり 谷かたづきてハ巻十 あしびきの山かたづきてとあると同じ

反歌一首

吾幾許麻氏騰來不鳴霍公鳥比等里聞都追不告君可母
わがこゝだまてどきなかぬほとゝぎすひとりきゝつゝつげぬきみかも

詠霍公鳥歌一首并短歌

多爾知可久伊敝波乎禮騰母許太加久氏佐刀波安禮騰

たふちのくいへハをれども。こごのくてさとハあれど
母保登等藝須伊麻太伎奈加受奈久許恵乎伎可麻久保
もほとゝぎすいまだきなかずなくこゑをきかまくほ
理登安志太爾波可度爾伊氏多知由布敝爾波多爾乎美
りとあしたにハかどにいでたちゆふべにハたにをみ
和多之古布禮騰毛比等已恵太爾母伊麻太伎已要受
わたしこふれども。ひとこゑだにもいまだきこえず

こぶくハ本なるべきころほりとふすんすと欲おりそとて此ちら奇
一その内太けつハ濁音ヲ用ひ一つハ清音ヲ用ふ。おなじく此書清濁ニ
だかゝてるゑ元唐が反歌のうれヽ今本従せり

敷治奈美乃志氣里波須疑奴安志比紀乃夜麻保登等藝
須奈騰可伎奈賀奴

ふぢなみのしげりハすぎぬあしびきのやまほとゝぎすなどかきなかぬ

志げりハ繁まく盛といはんが如し

右二十三日掾久米朝臣廣繩和

追和處女墓歌一首并短歌　巻九に葦屋處女を詠る哥
二首短哥四首あり、それに和ふるなり

古爾有家流和射乃久須婆之伎事跡言繼知努
いにしへにありけるわざのくすはしきことといひつぎちぬ
乎登古宇奈比壯子乃宇都勢美能名乎競爭登玉
をとこうなひをとこのうつせみのなをあらそふとたま
尅壽毛須底氐相爭爾嬬問為家留嬬嬬等之
きはるいのちもすてゝあらそひにつまどひしけるをとめらが
聞者悲左春花乃爾太要盛而秋葉之爾保比爾

さけばかなしさ、はるばなのふゝえさのえて、あきのたの、おかひる
照有惜身之、壮尚、丈夫之、語労美、
てれるあさらその、さのわるをとられ、まをとらるのこといかりさ、
父母爾啓別而、離家、海邊爾出立、朝暮爾、
ちゝはゝにまをしわかれて、いへさかのわうなびふいてうち、あさよひに、
満来潮之、八隅浪爾、靡珠藻乃、節間毛、惜
みちくるしほの、やへなみに、なびくたまもの、ふしのまも、をしき
命乎、露霜之過麻之爾家禮、奥墓乎、此間定而、
いのちをつゆしもの、すぎましにけれ、おくつきを、こゝとさだめて、
後代之、聞継人毛、伊也遠爾思努比爾勢餘、等黃楊小
のちのよの、きゝつぐひとも、いやとほに、しぬびにせよと、つげをぐし
櫛之、賀左志家良之、生而靡有

ぐしさのさしたるらし、おひてなびけり
くまハしさ、巻十八七夕歌にてなしもあやに久須之弥ともよめり、
奇しき也、くしきといふ言同じことに、称徳紀宣命ニ久須之久事乎思議許止
極難之ともいひ、源氏物語ほうけづきくすしのこと、いとおほのあやしかりけり
のたまふをしといへるハいとく勝るもの也、和奴ハ和泉、宇奈比ハ摂津
菟原也、巻九歌にも菟原とも菟名負とも、又菟會ともかけるとを勘ふ、
菟原やうてうなひとよむべし、原をふとよめバ、ひに通ハしてうなひと
よめるも、相争尓上に競争登とありて、又相争とあるハいふのし、尓の
ゑもいふべし、争ハ具なとの語なるべしハあひともふと有しの、まけ
ばかなしさハ、それをことしてのつまどひするをしとめらるゝのゆゑとさきて
ばのなしさといふべく、尓太要盛而、この尓ハ志の誤、太ハ太奈の誤にて三字な
ゑさそのえてちるまでハ、すゝく枝の木のちりれ栄るといへりと為ハいふれ

ぎはされど書千三尓太遥（ニホヘ）（この遥ハ遥の誤り）越賣（ヲトメ）ともよめるにて、ての字ざまなゝれ、
翁の説も定めがたし、按ずるに、壮士を荘子と誤る、丈夫のことにて、
父母にまをしわかれては、巻九に出る、母にかくれて出づまどひやしき
吾のら丈夫のあらそふ見れば、いけりともあふべくあれや、ししくしろ
よみにまたんとこゝとよめる同じきこゝ、節の習しらに、ここは悟く
の方も惜き命といへるは、音ましふされ、後のかればのばと略かるゝ、
黄楊小櫛土つのさしけらしは、乙女がつげの櫛をさしたるの生
ひ出でしといひ伝へて、かくよめるなるべし、巻九反歌に墓の上の
木の枝なびけりきくがごとちぬをとこにしよるべけらしも
乎等女等之後能表跡黄楊小櫛生更生而靡家良思母
をとめらがのちのしるしとつげをくしおひかはりおひてなびきけらしも
枝さし又生かはりしげくしくなりのごとくなびくと

右五月六日依興大伴宿禰家持作之
安由乎疾美奈呉乃浦廻爾與須流浪伊夜千重之伎爾戀渡可母
あゆをいたみなごのうらまによするなみいやちへしきにこひわたるかも
あゆハ東風也、既出、上ハ千へしきといはん序のみ
右一首贈京丹比家

010190519355